

The 6th CAMBODIA STUDY TOUR

立教女学院高等学校 Sachi A.

はじめに

私は、2019年の7月30日から8月6日にかけてのカンボジアスタディーツアーに参加しました。そこでの多くの出会いを通じて私が感じたこと、考えたこと、そして、考える中で私が出た答えを、文字を通して伝えることが出来たらいいなと思います。

・識字クラス

識字クラスでは、ただ文字が読めるようになるだけでなく、使うテキストによって一般教養を身につけることを目的としています。

・幼稚園

幼稚園は、モラルを身につけ、教育を習慣付ける場であり、幼稚園に通うことにより基礎教育期のドロップアウト率の低下が期待されています。

寺子屋活動について

「寺子屋は全ての人に教育を届けるキーとなる。」

寺子屋(Community Learning Center)は、年齢、宗教、性別に関わらず、全ての人が公平に学べる場として、コミュニティの中心になっている場所です。今回私が訪問した日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所とチョンクニア寺子屋では、寺子屋の活動についての説明をしていただきました。(下の写真はチョンクニア寺子屋)



寺子屋では、「自立」「生涯学習」という2つのテーマを中心に様々なプログラムが行われています。お話を伺ったチョンクニア寺子屋では、①識字クラス②幼稚園③図書館④英語クラスの4つのプログラムを行なっています。コミュニティの中心として銀行、集会場、伝統工芸品のホテアオイでの雑貨作りなどの仕事場として機能しています。また、水を綺麗にする装置を完備し、朝食レストランを開き、その利益で寺子屋の経営を賄うなど「自立」した経営が行われています。このような寺子屋活動では、運営からコミュニティに関わってもらう事で、「自分ごと」として活動にとり組めるようにしています。そうした過程の中で教育問題や貧困のサイクルから脱却し、教育の環が広がります。

塗り絵プロジェクト

「アンコール塗り絵プロジェクト」は、アンコール遺跡群があるシェムリアップ州内に住む子供を対象に行われている活動です。実は、シェムリアップに住む子供のほとんどは遺跡を訪れたことがなく、また、その歴史を学ぶ機会にも恵まれていません。遺跡の一部の文化財が売買されている状況下で、その歴史、重要性を伝え遺跡を守るためにこのプロジェクトが始まりました。最初に遺跡についての説明を受けた後、遺跡内のレリーフのモチーフが描かれた塗り絵を塗ります。そして、自分が塗った絵のレリーフを実際に遺跡の中から探します。今回私が行ったバイヨン寺院はとても広く、「インディー・ジョーンズ」の世界に入ったようでした。現地の子供たちが楽しむ様子を生でみることも出来、何年か先にもこの遺跡に来ることが出来たらいいな、と思いました。（下の写真は実際に探したレリーフと塗り絵）



ポル・ポトとクメールルージュ政権について

カンボジアは、私から見ると明るく、自由で、まるで太陽のような国でした。しかし、全てが全て明るい訳ではありません。太陽が落とす影のように、カンボジアにも影のような部分があります。その原因の多くを占めるのが1975年に発足し、政権を握ったクメールルージュとそのトップ、ポル・ポトです。彼らが実権を握った4年間にもたらされたカンボジアの変化はとても大きなものでした。都市の住民らを農村に移住させ、強制労働や拷問、虐殺を繰り返した結果、人口の2、3割に当たる約170万人が犠牲となりました。多くの学校や寺院などの施設が焼き払われました。虐殺は知識人や、僧侶を中心に行われたため、指導的立場の人間を喪失し、今日の教員不足や学校不足につながっています。ポル・ポトはもともと「人々は不平等だ。」という考えを持っていたにも関わらず、人々を「奴隷」から解放する過程で人々を「奴隷」に変えてしまいました。クメール語で「クニョム」という言葉には「私」という意味と同時に、「奴隷」という意味があります。カンボジアの人々は日々の中で、かつてのことを思い出すことがあるのでしょうか。今回伺ったツールスレンとキリングフィールドではクメールルージュ政権の行為の爪痕を見ました。そこでは、実際に首を吊った場所や、殺される前の写真、本物の頭蓋骨などを見ることが出来ます。それらはとても印象深く私の中に残っており、思い出ただけでも、背筋が凍り、胸がざわつきます。現在のカンボジアの教育では、ポル・ポト時代に触れられることがほとんどありません。現首相のフン・センがクメールルージュ政権とつながっているからです。そのため、カンボジアの人々は、外国の書籍や親戚からその時代のことを学びます。今回私たちに案内していただいたガイドさんは、お墓と幽霊が出てくる夢を案内する中で頻繁に見たそうです。カンボジアの人々にとってその時代の爪痕は心にも残っているのだと感じました。

カンボジア古典舞踊



ツアー中にカンボジア古典舞踊を観ることが出来るレストランにご飯を食べに行きました。そこでは、計5つのダンスを鑑賞しました。カンボジアの古典舞踊の手の動きは、植物の命の循環を表していて、とても幻想的です。クメール王朝時代から伝えられているこの舞踊は、クメールルージュ政権に一度断絶しかけましたが、踊り子の努力により今も続いています。もし、機会があればダンスを実際に見て、壮大な宇宙観を多くの人に感じてもらいたいです。

スバエク・トムについて

スバエク・トムはユネスコ無形文化遺産に登録されている影絵のようなものです。



今回のツアーでは、『ラーマーヤナ』の一部を観ました。音楽が重なり、その場の圧に音の圧が加わって迫力満点でした。

ツアー直後の心境について

正直なところ、カンボジアスタディーツアーを終えた直後は、戸惑いや矛盾した気持ちが大きく、また、とても考え込みました。自分が事前に学んで行ったことの多くは本当で、それを目の当たりにした時、ツールスレンやキリングフィールドを訪れた時、復学支援クラスの子供達と触れ合った時、どうしたらいいかわからないと感じることが多かったように思います。帰国して、学んだことを伝えることも、私の伝え方のせいでカンボジアの印象が悪くなることも怖かったです。カンボジアの人たちから学んだことはとても多く、その分何か返せるものがあるのか、という点も不安でした。

感想

ツアー直後、いろいろ考え込んで、少しずつ自分の中で腑に落ちるものが出てきました。私は、昔「世界には教育を受けられないかわいそうな子供達がいる、だから自分たちがこの国で教育を受けることが出来る環境を幸せに思いなさい。」と教えられたことがあります。その言葉になんとなく抵抗を感じました。「教育を受けていない」という断片的な部分でその人達の人生を「かわいそう」と決めつけ、自身は優位に立っているという考え方があまりにも自己中心的に思えたからです。カンボジアで多くの人と触れ合う中で、彼らの生活をマイナスの面からだけではなく、プラスの面からも観てもらいたいと感じました。何事も悪い方が目につきがちです。でもそのような時でも考えを流転して良い面もみる姿勢が大事だとおもいます。通っている学校がキリスト教の影響もあるのか、私はよく「幸せはお金じゃない」という言葉を耳にします。正直、私はその意見に反対です。何にでも幸せに繋がるからです。幸せ≠お金ではなく、「幸せはお金だけじゃない」というべきでしょうか。カンボジアに行き、無知な自分を恥じました。これから、世界のことを知り、色々な国に足を運んで、様々なことを学んで、その経験と共に生きていくような人にならたら良いなと思います。